第 2 回北陸圏広域地方計画懇談会議事概要

1．日時

平成 20 年 6 月 4 日（水） 13：30～16：00

2．場所

ホテル金沢

3．出席者(敬称略)

西頭座長、片山委員、酒井委員、祖田委員、高山委員、中村委員、 長尾委員、安島委員
柳井委員、吉田委員　　（計10名）

4．議事（概要）

（1） 開会

（2） 挨拶

和田国土計画局大都市圏計画課長
岡田北陸地方整備局副局長

（3） 委員紹介

（4） 座長挨拶

（5） 議事

1） 北陸圏広域地方計画について

事務局から資料1～7について説明

5．主な発言内容

- 北陸圏の特性は災害の多い地域であり、災害に強い地域づくりが必要。また、圏域が細長く形成されていることから、これらをコンパクトに繋げた圏域形成が必要。
- 北陸圏での子育て環境については、共働き世帯も多いなど優れた環境を有しているものの、今後も北陸ならではの子育て環境を未来永劫にわたって継続していく必要があり、そのためには子育てへの支援が重要。
- 中高年の労働者が多い中で、こうした人々が今後も働いていける地域づくりも大切である。
- コナベーションについては線状に都市がつながっていることをうまく活かす必要があり、北陸新幹線の開通により物理的な近接性は向上しているが、同時に料金抵抗の克服も必要となる。
- 中山間地域の安全・安心としては、その地域に住み続ける上での生甲斐を得ることや日常生活の利便性の確保を念頭に、「安全な暮らし」として、防災や防犯への備え、医療の充実などが必要となる。
- ものづくりの観点からすると、産業の「融合（ゆうごう）」とか「融業（ゆうぎょう）」といったことを促進していくことが求められている。富山のバイオや医薬、石川の機械、福井の繊維など得意とする産業が先端技術により相互に連携することにより、新しい産業が創出されていく。
- 炭素繊維は航空機の機体や車の車体に利用されるなど、地域の特徴を生かした新産業の展開する機会を大いに持った地域であることを認識するべきである。

- 具体的な連携を促進する上で、大学の連合体を組織していくことも考えられる。そうした背景を持って、未来志向の目標を地域全体で示し、共有することができるかが重要である。
- 物流・産業においては、眼に見えない県間の垣根を取り払い、北陸全体のブランド価値を高めていけるような協力・協調体制をつくっていく必要がある。
- 特に物流では、国際的な都市のレベルで何処の港とどのようなつながりを創出していくのかを突き詰めて検討する必要がある。
- 具体的には、釜山の場合は欧米の基幹航路へのハブとして釜山港を考えた物流網の構築であり、物を動かすのには便利である反面、産業の活性化といった面では疑問がある。中国の天津は、トヨタやエアバスの工場が立地展開していることから、天津港へのハブとして北陸諸港を位置づけることも考えられるなど、中部圏域との中間地点として、それぞれの港の機能を発揮することが期待できるなど、北陸諸港にとって、どこと結びつくことが効果的か見極める必要がある。
- 国際物流に関しては港湾だけを見るのではなく、北陸圏内の広域交通ネットワークを強化する取組として、物流コストを下げるような社会実験を行うことも考えられる。
- その際、港湾ごとの特色ある展開（港湾ごとの役割分担）を前提とした物流戦略の取組としていくことが必要である。
- 北陸圏広域地方計画としては、今後「観光」に力点をおくような整理も必要と考えている。
- 中国から多くの観光客が訪れるようになってきているが、これら海外観光客にとっての北陸圏の魅力を詳しく研究する必要があるのではないか。それら海外観光客の需要を明確にした上で、具体的な方策を提案していくことが必要である。
- 北陸圏では食べ物、雪、歴史、文化などのコンテンツを多様に有しており、これらを最大限に生かすためにも、ニーズを正確に把握し提供することで、観光を充実することが可能と考える。
- 広域圏形成の観点では、これまで県単位で取り組んできていることから、個々を優先する意識が強く残っている。
- 広域圏での協調体制は今後重要であり、経済や文化、社会などをテーマとして大学や研究機関を含め意見交換や共同研究を積極的に進め、広域圏としての一体感を高めていくことが必要である。
- 東アジアの地域経済は大きく変化しつつあり、環日本海経済として各国がどの方向を向いている（向こうとしている）のかを的確に察知し、各県の経済はどのような方向を向いていくのかを見極める検討が重要となっている。
- 東アジアの国々へ行くと、高層ビル群が建設され、まちもきれいになるなど経済発展を実感する。しかも、文化的な成熟もしてきている。
- 「日本食」「温泉」「日本文化」といったものが、中国等からの観光客のニーズのベスト5に入っている。
- 中国や香港、台湾などは、日本に比べて出国率が高く、近年日本を訪れる観光客は、すでに第2、第3ラウンドになってきており、直接日本の文化を体験することを求めるなど観光の目的に変化が見られるようになってきている。それと同時に日本の文化への理解も深まってきている。
- 食文化など北陸的なもので、国内で評価されるものは、中国など東アジアの人々にも魅力的な地域

として受け入れられる素地ができてきたと感じている。

- ミシュラン東京がアジアで初めて発行され 3 つ星が8軒についた。これはフランスに次ぐ多さであり、日本の食文化に対する国際的な関心も高まっている。
- 観光を通して見ると、東アジアの人々のニーズは 5 年前と比べ確実に変わってきており、これを的確に把握しておくことは重要である。
- 何を見てもらうかという価値をつくりだす部分について観光は無力であり、いろいろなほかの分野とかかわってくる。その中で、北陸圏の持つ観光資源としての産業観光、エコツーリズム、環境観光、棚田などの景観観光といった、観光における最先端の取組を進めていくことが必要である。
- 「環日本海諸国をはじめとした東アジア」との記載が用いられており、三大都市圏を後背地とした日本海側の玄関口として北陸圏を位置づけていることは大いに評価できる。
- わが国の貿易では、対中国が対アメリカを超え、太平洋側の貿易が相対的に低下し、アジア内での貿易が拡大してきている。
- 伏木富山港からの中古車の輸出もロシアへの取扱が増えており、特にロシアへは、新車の輸出量も増えている。
- ロシアでは、プロジェクトをいくつか実施しながら国全体を発展させるといった政策に取り組んでおり、そのような極東での取組を進めるロシアとの関係を深めていくことも今後予想されるのではないか。
- 対中国との関係からは、省エネ対策に対する自治体同士の協力が求められている。その中で、二酸化炭素の排出権取引なども今後考えられる。また、大学間の交流を経済交流へ発展させることが求められている。こうした動きは、各県と国の各省が、点と点で連携する国際関係から、面的に広がるネットワーク的な関係に広がるものと期待できる。
- 自治体間交流の動きとしては、日本とロシアとの自治体交流会議をハバロフスクで開催しており、このような自治体間交流の面的拡大への取組にもトライするようになってきている。
- 北東アジア観光会議では、日本の魅力として「タタミ」「サシミ」「温泉」などが挙げられようになり、日本の文化が理解されてきている。
- 戦略の組み立てにおいては、北陸圏特有の問題なのか、全国的な問題なのか、を区分するなど、ロジックに整理し示す必要がある。その際、言葉の意味も併せて整理しておく必要がある。
- かつて、終戦後から高度経済成長期には、人口が増加し多すぎるといわれた時代であった。反転して近年は人口減少時代となり、北陸圏のポジションは、人口減少の時代だからこそ相対的に上がっているのではないか。そういった意味では、この人口減少も危機感ではなくそれを楽しむといった発想が必要ではないか。
- 地域が自主性を持てる時代にあって、地域に「今あるもの、売り」を育み活かしていくことが重要であり、今はそれができる時代となっている。
- 大量にものを作る地域とそうでない地域とは分かれてよく、地域の特徴を生かしていくことを基本に色々な取組を実践し、楽しい生活を送ることができる地域づくりをすることで人は自然に集まってくるものであり、「暮らしやすい場所」という情報が発信できると良いのではないか。
- 教育や研究に関しては、小・中・高までは、多くの優秀な児童、学生が育っているが、一方で地元の

大学には進学しない。

- 日本の大学も国際化が進んでおり、北陸先端科学技術大学院大学では、学生の 20%が留学生、教師も 10%が海外からの先生である。彼らが日本に来たいと思う魅力は、研究レベルの高さもさることながら、日本の文化に触れることなど、国際観光的な魅力のプラスアルファが大きく、その面での魅力向上への取組も重要である。
- 大学の研究では、東大、京大など旧帝大と称される大学に依然多くの研究予算が集中している。独立行政法人化する中で、3つの国立大学が個々に研究をしていくことは、フィージビリティが低いと感じており、北陸圏の地域力を引き上げていくためには、圏域の大学が連携し、まとまっていくメカニズムを構築し、これらの強い大学との競争に負けない強い大学を創っていくことが必要である。
- 資料3にある目標の3つ目、「三大都市圏や環日本海諸国をはじめとした東アジアにつながる日本海側の中枢拠点の形成に向けた基盤の強化」に対しては、隣接圏域との交流・連携も含めた取組が必要である。
- 中部圏の経済力は強く、日本海を挟んだ対岸との取引については、日本海国土軸を明確にしたうえでここを基点とすることを位置づけていくことが重要である。そして具体的にはどういった内容があるのかといったまとめかたをすると横の連携が強化できる。
- プロジェクトについては、各県が実施している内容を網羅しており、これを広域化して取り組もうとすることの背景や意義について整理し、方向性を示すことにより各県の理解を深める必要がある。
- 広域連携プロジェクトとして示されている 10 のプロジェクトはそれぞれに重要な意味を持っており、確実に実践していく必要がある。一方で、財源の確保などブレーキになる要因も多くあり、全てを同じように実行していくことは難しい。10 のプロジェクトの相互の関係を十分に整理し、相互のシナジーが発揮できるよう、アクション(プログラム)の相互の連携を図っていくことも必要ではないか。
- 各県の様々な想いもある中、3つの県が連携して取り組む効果を明示して、3県の役割分担など実施体制も明らかにしていく必要がある。
- 北陸圏のこれまでの取組を振り返ると、治山治水や道路などの基盤整備にいち早く取り組み、そのことが今日の職や暮らしの発展につながっていると思う。そのような中で、広域連携プロジェクトでは、外部へのPRとしての切り口になるような位置づけが可能であり、ここで具体的に示すことのできるものについては踏み込んだ記載をしても良いのではないか。
- 北陸の特徴を出していくとするなら、他のブロックでは示されることのない「雪に強い地域づくりプロジェクト」を設定し、広域交通において、雪対策を進めることなどを記載し、北陸としての情報を発信していくことが必要ではないか。
- 北陸圏の発展の基礎として、手取川や神通川、常願寺川、黒部川などの河川整備が進められてきたが、そのような治山治水といった面から見た森林保全、水資源確保も含め関係機関との連携を図りつつしっかりと行っていくといった姿勢を示しておくことも必要ではないか。
- 就業の確保についても重要であり、特に人材の育成と職場の確保に向けて、連携して取り組んでいくことも必要である。
- 富山の標高3,000mの立山連峰から富山平野を経て海抜−1,000mの富山湾に続く地形は、地球環境

の縮図として、観察する上で重要な水の循環、命の循環のモデルとして認められることから、この高度差 4,000mの地球環境モデルを地域活性化に結びつけていくことも考えられる。

- 地域活性化においては、人づくりが非常に重要である。資料5、5頁に示された広域連携プロジェクトのイメージ図は、地域構造をイメージして示されているが、10 の広域連携プロジェクトのそれぞれの位置づけについて、人づくりや人の暮らしといった切り口から見直すことで、プロジェクトの見方も変わってくるのではないか。
- 計画策定後、プロジェクトをどう動かしていくのか、が非常に重要となる。
- 北陸圏の良さを、プロジェクトのシーズとして深堀し、外部環境の変化も踏まえて、目標を定めていくことも重要であるが、「あいまいな目標」から、実務者の協議で、プロジェクトを具体的にしていく体制づくりなどの仕組みづくりを進めていく方法も考えられる。
- 県や市町村が共通の土俵で議論することのできる切り口からプロジェクトを構築し、議論を活性化させることにより具体策を示すことも必要である。
- 中国の大学城プロジェクトのような、キーテクノロジーを取り上げた北陸全体での大きなクラスター形成を推進する仕組みを北陸圏においても立ち上げたらどうか。九州学研都市では、完全リサイクル型のハウス研究を目に見えるように実施している。このようなこともくっつけながら少し大きな構想を練ってみてもいいのではないか。
- 中山間地域では医療サービスの低下が深刻になってきている。限られた医者などを地域連携の中でどのように活かしていくのかが、中山間地域の安心した暮らしの確保の面から必要である。
- 特に高次医療については、ICTを活用したサービスの向上が大切である。
- 北陸圏では、救急ヘリがなく、防災用ヘリを活用しているような状況とも聞いている。しかも、患者のところまでは、5～10 分で救急車が到着できても、そこから救急病院まで数十分を要するというようなことも聞いており、救急患者の搬送時間を短縮し、人々の生命を守る安心した暮らしの確保には、救急ヘリの強化、高速交通の強化、さらには高速道路を有効に活用する上で有効なスマートICの整備をより一層充実していくことが必要である。
- 救急車専用の簡易インターチェンジなどがあると良く、そのようなものを組み込んだ「広域医療の高度化連携のプロジェクト」も必要ではないか。
- プロジェクトの数は必ずしも 10 個に限ることはなく、北陸圏において進めるべき重要な課題を新たな切り口として増やしていけばよいのではないか。
- 広域的なプロジェクトを推進するためには、情報の共有化を図ることにより実効性を高めていくことが必要である。具体的には、10 のプロジェクトについてそれぞれの状況や進捗などについて情報を積極的に発信し、多くの主体者の関心を高め、参加の場を形成していくことが必要である。
- 観光関連のプロジェクトなどでは、市町村単独での予算は少ないものの、その予算を連携するなどの工夫をすることで、効果的にプロジェクトを推進する方法がもっとあるのではないか。そのような、10 のプロジェクトをベースとした新た視点による県全体とか、複数県による連携など、広域的な推進体制の提案も必要ではないか。
- 北陸圏の地域実態をみると、東アジアなどにも魅力的な観光資源が多数あるものの、温泉地もスキ

一場のある山間地も、疲弊してきている。そのため、今後の北陸圏の観光振興にあっては、高速交通システムの整備を踏まえて地域の再構築も併せて推進していくことが必要である。

- そのような観光振興について、「北陸の新しい時代ニーズを捉えた新しい観光方策」というテーマで昨年度検討を深めていることから、北陸圏広域地方計画に盛り込んでいただきたい。
- 会議などを開催する際、食や宿泊などもパッケージでセットしてほしい、というような問い合わせが商工会議所などに寄せられているようであり、そのようなニーズは高いと思う。ホームページの情報は点でしかなく、これらを結びつけるニーズに応えられるような、地域情報システムを構築していくことも検討する必要があるのではないか。
- 富山にある“称名の滝”は、落差日本一の滝で有名であり、特に雨の時は素晴らしいようで、地元の人はこういったことを知っていて、降雨時に見に行くと聞いている。こうした一般に知られていない名所がまだたくさんあり、そうした資源を有効に活用していくことが重要である。
- 東アジアからの観光では、セントレアから入国し小松空港から帰国するようなニーズはあっても、チケットが手に入らないためその間の国内観光を楽しめないといった声もある。実際には、中部縦断をする間にはたくさんの観光資源があるため、地元に潜在する観光資源を掘り起こし、もっと充実させるなど観光対策を本格化し、地域の活性化に繋げていくことが必要である。
- 広域の話が本当に動くようになれば、都道府県が物事を整理するというより生活圏や中核的な地域が力を強くしていく。圏域内のことに関わるのはプロジェクトとなることから、広域連携プロジェクトの個別の中身に入る前段として、都市的なサービスも含めプロジェクトにならないこともあわせて（生活）圏域内をしっかりと構築していくことが必要との観点を明記した上で、広域連携プロジェクトを位置づけることが必要である。
- 観光で指摘のあった「特定の地域だけのことを紹介する」ことは他の分野でもありうる。こうしたことが、広域圏といった考え方が出てくることで改善されるのはいい事である。この場合にも、共通の利害が無いと実践化が難しいが、ITを使うことや、人の動きを活発化していくことなどでプロジェクトが具体化ししていくことが必要である。大学は自由に連携や活動が可能であり、大学間の連携からはじめることも考えられる。
- 全国計画について、これまでの全国総合開発計画ではそれぞれの計画においてスローガンがあった。そういった視点で、国土形成計画（全国計画）を見ると、「広域圏の計画」に重点がおかれている。
- 広域ブロックごとの成長を考える上で、現下の一極集中の是正なしには、その実効性は確保できないのではないか。そのため、全国計画において、そのような一極集中への是正の方策について記載すべきではないか。
- その際、大都市圏と地方圏の関係を今後どうしていくのか、その方向性だけでもイメージできるような整理が必要である。
- 「人口爆発ともいえるような人口増加の問題」、「エネルギー問題や地球温暖化の問題」など根本的なものが本質的に変化してきており、これら全世界的な課題への対応という観点から国土利用の中で、「林地」「農地」の利用を記載していく必要がある。

・　災害に関しては、災害発生時の対応や減災といったことが記載されているが、それに加えて、地球温暖化がもたらす異常気象によって災害規模が拡大しており、一回の災害により10万人単位で死者が出ることも少なくない。地球温暖化などへの対処には、国内だけに限らず、国際的な協力に関する記載も必要ではないか。

（速報のため、事後修正の可能性があります。）